

N けがに対する応急手当

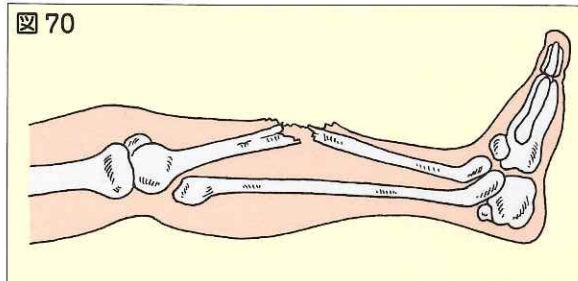
1 骨折に対する応急手当

1 部位の確認

- 痛がっているところを聞きます。
- 可能であれば痛がっているところに変形、出血がないかを確認します。

ポイント

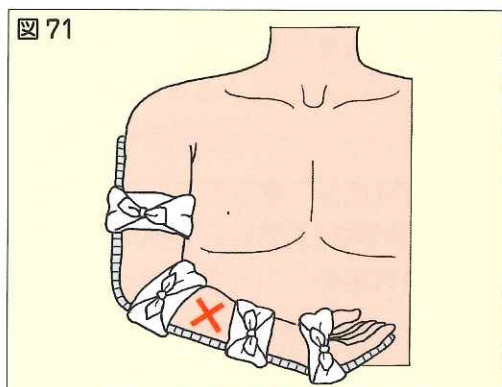
- 確認する場合は、痛がっているところを動かしてはいけません。
- 骨折の症状
（激しい痛みや腫れがあり、動かすことができない。変形が認められる。骨が飛び出している。）
- 骨折の疑いがあるときは、骨折しているものとして、手当をします。



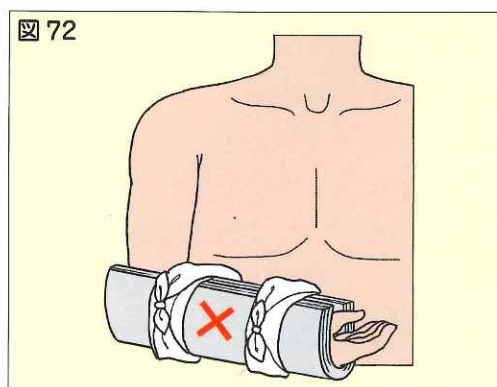
骨折

2 固定（そえ木、三角巾など）

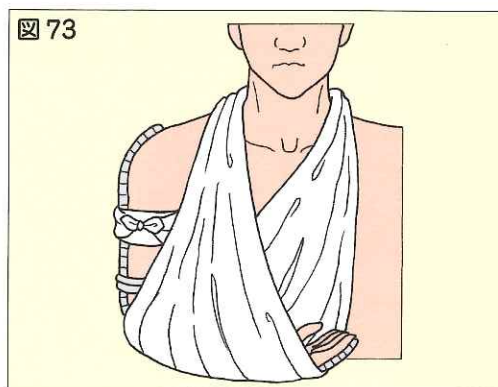
- 変形している場合は、無理に元の形に戻してはいけません。
- 協力者がいれば、骨折しているところを支えてもらいます。
- 傷病者が支えることができれば自ら支えてもらいます。
- そえ木を当てます。
- 三角巾などでそえ木に固定します。



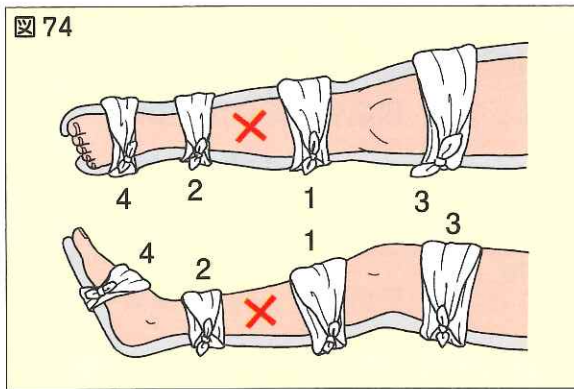
腕の固定



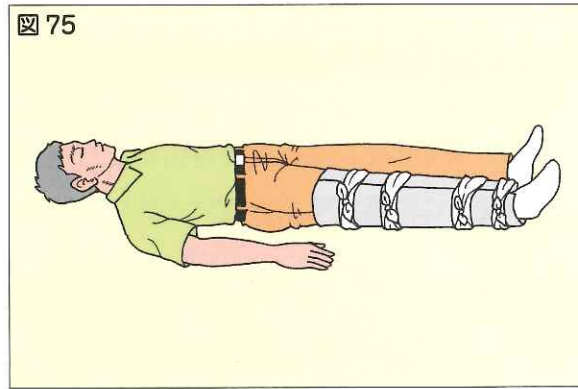
雑誌を利用した前腕部の固定



三角巾などで腕をつる



足の固定



ダンボール等を使用した下肢の固定

ポイント

- そえ木は、骨折部の上下の関節が固定できる長さのものを使用します。
- 固定するときは、傷病者に知らせってから実施し、顔色や表情を見ながら固定します。

119番通報が必要な場合

- ふとももが変形している場合や、骨が飛び出していたり、変形している部分にきずがある場合、それ以外にも多数のきずがある場合は、ただちに119番通報してください。

2 | ねんざ・打ち身（打撲）に対する応急手当

- 患部を冷水や氷水などで冷やし、内出血や腫れを軽くします。
- 長時間冷やすと皮膚や神経をいためる可能性があるため、20分以上続けて冷やさないでください。

3 | きずに対する応急手当

1 | きず口の手当

- きず口が土砂などで汚れているときは、速やかに水道水などきれいな水で十分に洗い流します。

2 | 包帯法

- 包帯は、きずの保護と細菌の侵入を防ぐために行います。
- きずを十分に覆うことのできる大きさのものを用品します。
- 出血があるときは、十分に厚くしたガーゼ等を用います。
- きず口が開いている場合などは、原則として滅菌されたガーゼを使用し、脱脂綿や不潔なものを用品してはいけません。

ポイント

- 包帯は強く巻くと血行障害を起こし、緩すぎると包帯がずれたりするので注意して巻きます。
- 包帯の結び目は、きず口の上を避けるようにします。

3 | 三角巾

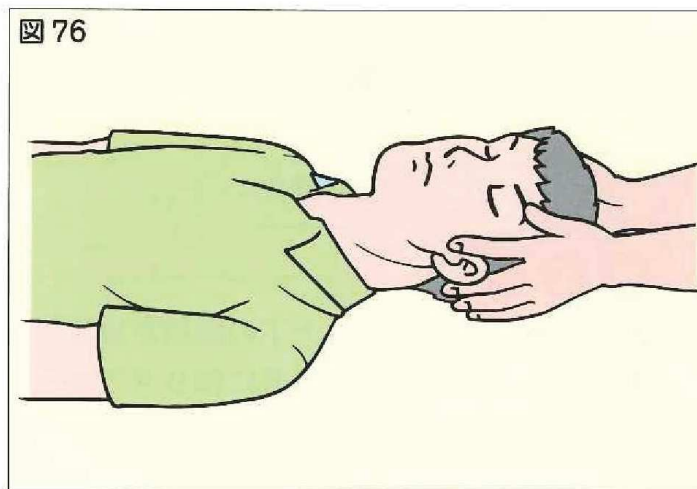
- 体のどの部分にも使用できます。
- きずの大きさにとらわれずに使用できます。
- きず口にはガーゼ等を当ててから三角巾を用いるようにします。

4 首を痛めている場合の応急手当

自動車事故や高い所からの墜落、肩から上の大きなけがなどでは、傷病者は首の骨（^{けいつい}頸椎）を痛めている可能性がありますので、首の安静を図ることが大切です。

首が動かないようにします

- 意識があれば、頭を動かさないように伝えます。
- 次の症状があるか聞いて、一つでもある場合は、首の骨を痛めていると判断します。
 - 首が痛い？
 - 手足がしびれる？
 - 手足に力が入らない？
 - 呼吸は苦しい？
- 意識がなければ、首の骨を痛めていると仮定して次の対応を行います。
 - 頭を両手で支え、首が動かないようにします。
 - 頭や顔にきずがあるか注意します。
- 声をかけ、元気づけます。



首の固定

ポイント

- 傷病者のいるところが安全であれば、頭が動かないように両手で支えて固定し、救急隊に引き継ぐまで不必要な移動は行いません。
- 傷病者のいるところが危険な場所であるなどやむを得ない場合に限り、安静に必要な最低限の移動を行います。

119 番通報が必要な場合

- 首の骨を痛めている可能性がある場合には、ただちに 119 番通報してください。